

地図授業のワンシーン 2

— 「色」からわかる地域のように—

地図・地理普及特別班

■ 「色」に対する認識の現実

平成14年に、地図・地理普及特別班が、全国の小学生12,000人を対象に「地図帳に対する意識調査」を実施しました。

その中で、家庭でも地図帳を使っているという児童に「どのような場面で使うのか」を尋ねたところ、①遊びや旅行へ行くときの場所確認に使う。②宿題や予習・復習のために使う。③興味のある地域の場所や特産物などを調べる。④TVや新聞ででてきた地名を探す。という回答が上位を占めました。

この結果をみると、家庭でも地図帳を使うという熱心な児童でも、その興味は地名や産物記号に集中し、地図の「色」にまでは関心を示していないと思われれます。

■ 「色」のもつ意味とは

児童にかぎらず、大人でも地図を使う際、まず、地名や記号に注目するのは一般的なことでしょう。

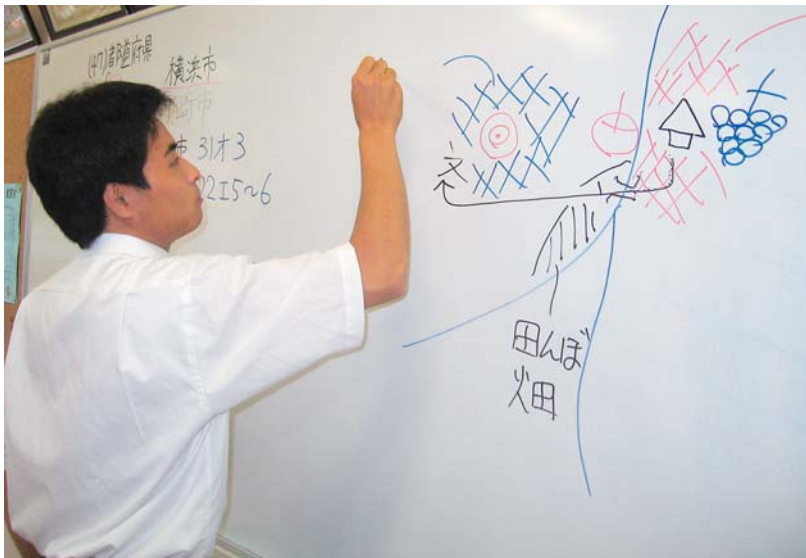
しかし、「色」にもさまざまな情報が盛り込まれており、これを読み取ることで、地図活用の幅や楽しさが広がります。

帝国書院の小学校用地図帳では、300万分の1の「日本列島を見わたす地図」は等高段彩、200万分の1、100万分の1、50万分の1の日本の各地方・地域の拡大図は土地利用と等高段彩で色分けしています。このうち、拡大図にはその大きな縮尺を活かして、土地のようすを具体的にイメージさせる役割があります。拡大図はこの色分けによって、行ったことのない場所であっても、その土地のようすを読み取ることができるようにつくられているのです。出前授業では、「さくいん」「記号」の学習に続いて拡大図を使って、地図の「色」について学習しています。

■ 実際の景色と比較してみよう

児童が色よりも地名に興味をもつのは、「自分や親せきが住んでいる」「旅行で行ったことがある。」「自分や友だちの名字と同じ地名がある」という、身近なことがらとの繋がりがあるからでしょう。そこで、出前授業では、学校の所在地の市町村が載っている拡大図を開き、「今、みんながいるところは地図では、どんな色になっているかな?」と問いかけ

ます。すると児童は、市街地にある学校であれば「きいろー」と答えてくれます。次に「では、黄色は何を表しているのかな?」と問いかけます。ここで児童が答えられないようなら、「このページの中に答えがあるよ。探してみよう」と問いかけ、凡例を捜させます。ここで「黄色は市街地を表しているんだね。じゃあ、市街地ってどういうところなんだろう。外を見よう」といって、窓から外を眺めさせます。「わかりましたか。今、見たように建物がたく



出前授業のようす

さん建っていて、人がたくさん住んでいるところを市街地っていうんだよ。地図の色は、その地域がどのように使われているのかを表しているんだね」と説明します。学校の周りが田や畑、果樹園の学校でも同様の説明をします。

このとき、講師はときおり実体験をもとに説明することもあります。たとえば、長野県の果樹園近くで育っていれば、臨場感あふれる説明が行われます。

■富士山のむらさき色はどんな意味？

次に山地の高さを、色で表していることを説明します。ここでは、富士山を例にして、「富士山のむらさき色の部分は何を表しているのかな？」「濃い茶色の部分は？」「うすい茶色の部分は？」と問いかけます。すでに土地利用表現の学習で凡例の読み方はマスターしていますので、児童からは、「1400メートルより高いところ」「600メートルから1400メートル」「600メートルより低いところ」という答えが返ってきます。

しかし、これだけでは、高さの学習は不十分です。高さという「立体的」なものが地図という「平面」で表されていることを教える必要があります。そこで山を側面から見た絵を描き、それを高さで区切り、それぞれの高さが地図ではどの色で表されているかを説明します。

出前授業での経験を通じて感じるのですが、土

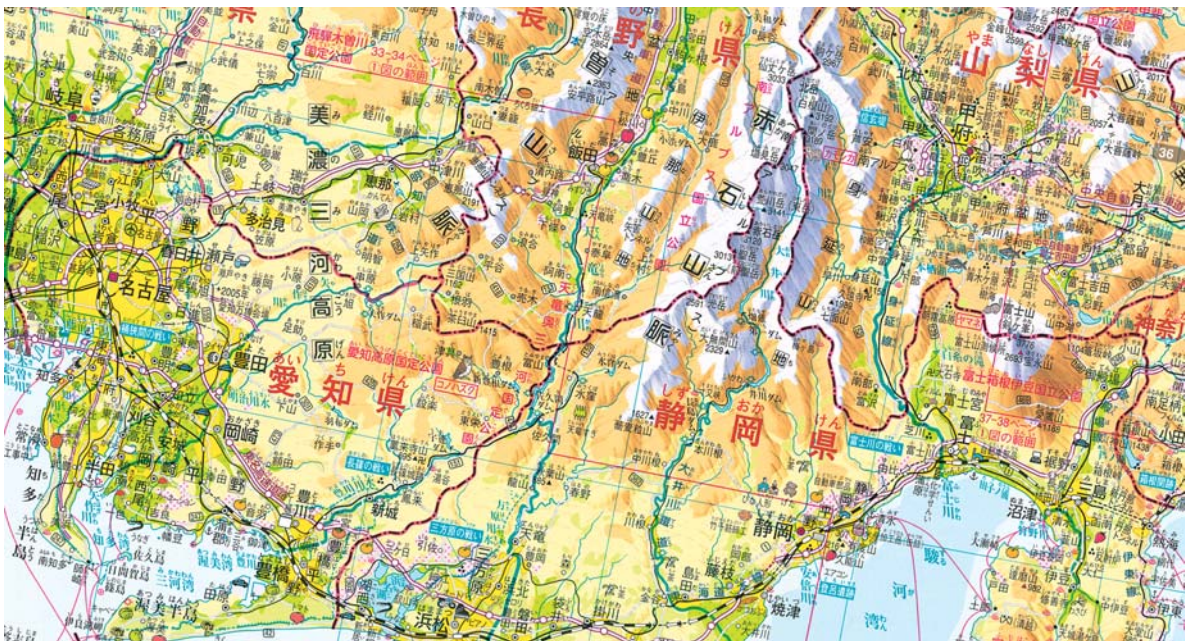
地利用の学習に比べ、高さの学習は、児童にとっては、理解がむずかしいようです。ぜひ、先生方には、帝国書院版地図帳初訂版p.6「渥美半島の地図」、同最新版p.6「わくわく島の地図」を活用して、高さの学習をわかりやすく教えていただきたいと思います。

■地図の「色」を学ぶ意味とは？

地図とは、そもそも実際の地域のようすという「具体」を平面図という「抽象」におきかえて表現したものです。帝国書院版の小学校用地図帳では、土地利用や高さという「具体」を色という「抽象」に置き換えています。つまり、地図を読むことで、自然と「抽象」から「具体」をイメージする訓練をしているわけです。

「抽象」から「具体」をイメージする場面は地図の読図以外にもたくさんあります。たとえば、自動車の運転をする際、さまざまな交通標識を瞬時に読み取ることで、交通法規を守り安全に運転できるといえるでしょう。これも標識という「抽象」を交通法規という「具体」におきかえていることになります。

小学生が、地図の色から、まだ行ったことのない、さまざまな地域にあれこれと想いをめぐらすことは、社会科の学習のみならず、大人になってからも役に立つのではないのでしょうか。



帝国書院小学生の地図帳（初訂版）p.32